招待講演Ⅰ

北里柴三郎と適塾

芝　哲夫
大阪大学名誉教授

北里柴三郎は破傷風菌さらにはペスト菌を発見し、伝染病研究所、北里研究所、慶應大学医学部を創設したわが国医学界の巨人であることはよく知られている。その北里研究所が開かれたこの地で招待講演の機会が与えられたことは私にとって身に余る光栄であると同時に、医学史御専門の皆様の前でお話しするのは忸怩たるものがあります。それで私がかねてより調べている緒方洪庵の適塾門下生と北里との関係に焦点を当てた話をさせて頂くことで責を果たしたいと思います。

北里柴三郎は明治四年（一八七一）に故郷小国を出て、この年熊本に開校された古城医学校に入り、オランダ人医学者マンスフェルトに就いて医学を学んだ。この時、マンスフェルトの通訳を勤めた助教の奥山静叔と高橋正直はともに適塾出身で、奥山は塾頭を勤めたほど緒方洪庵の信頼の厚い人物であった。北里はまずこの二人の影響を受けて適塾の心にも触れたことと思われる。はじめ軍人志望であった北里はマンスフェルトや奥山、高橋の熱意に動かされて、医学こそ男子一生の仕事に足ると悟って医学専攻の道を歩む決意をする。

北里は明治七年（一八七四）に緒方洪庵の医学上の最高弟であった長与専斎が校長を勤める東京医学校に入学して

その薫陶を受けることになった。明治一六年（一八八三）に東京大学医学部を卒業した後も北里は長与を頼って衛生局に就職した。長与は北里の天賦の才能を見抜いて、ドイツへの留学費を工面して、ベルリンのコッホの許へ送り出した。

北里はコッホの研究室で当時培養不可能と考えられていた嫌気性菌を水素気流下で培養する方法を発明して、破傷風菌の純粋培養に成功した。さらにその血清療法も確立させて、世界の細菌学者の注目を受けることになった。これは長与の暖かい支援で予定の留学期間が予定より三年も延長できた結果であった。その北里は英米の研究所から厚遇の招聘を受けたが、それらをすべて断って日本の医学のために尽くそうと明治二四年（一八九一）に帰朝した。しかし当時の日本にはこの北里を受け入れる所がなく、研究の場を失った北里は帰国後、無為な日を送ることになった。この状況を見かねた長与は適塾の同窓の福澤諭吉に相談を持ちかけた。その時まで北里を知らなかった福澤は義侠の心を発して北里のためにまず芝山内の自分の私有地に一〇坪の研究所を建てて北里に提供し、さらに資金も斡旋してここに最初の伝染病研究所が出発することになった。伝染病研究所はその後、愛宕下を経て、白金台町に移り、さらに三光町に土筆ケ岡療養所が出来上がるが、これらはすべて福澤の援助の許に創設、発展したものであった。

北里は明治二七年（一八九四）に香港に赴いてそこでペスト菌を発見する。この時、同行の東京大学の青山胤通がペストに罹患したのを聞いた福澤は大いに心配して多くの人に働きかけて北里を一日も早く帰国させようと奔走したという。これは親身以上の親切である。帰国した北里の令名を慕ってその門には野口英世、志賀潔、秦佐八郎ら、後のわが国の医学界の俊秀たちが集まることになった。

大正三年（一九一四）、この伝染病研究所が内務省から文部省東京大学附置研究所へ移管されることが突然予告もなしに北里に通達される。長年築き上げてきた伝染病研究所が一夜にして大変化を受けることに耐えられなくて、北里は即日辞表を提出するが、志賀以下の多くの所員も北里に従って総辞職することになった。その後、月余にして、

白金三光町に新たに北里研究所が設立されたのはその時すでに世を去っていた生前の福澤の親身の忠告によって、かねてそのような事態に備えて養生園運営費が蓄積されていたからである。大正九年（一九二〇）に北里が慶應大学創設の任を引き受けるのもそのような福澤への報恩の気持に発することに違いはない。

緒方洪庵は弟子たちに常に「世のため、人のため、道のため」と説いていた。北里は洪庵に会うことはなかったが、その適塾の心が北里に通じるところがあったことが適塾門下生を動かして北里を援けたと見ることができる。また適塾出身者との交流がなければ偉大なる北里柴三郎も生れなかったとも思える。